

東北復興日記



167

「今年も年の暮れが迫って参りました。こうしてご縁ができてましてご支援いただくことができ、ニットサークル一同大変有り難く思っております。ささやかなお礼ですが、メンバーが編んだ作品を同封させていただきます」。このような文面の手紙を添え、毛糸の支援者へのクリスマスプレゼントをお送りしました。



ベテランママの会代表
番場さち子さん



感謝編み込んだ贈り物

当会のニットサークルⅡ写真Ⅱは、福島県南相馬市で月に二回集まって、編み物をするながら互いを励ましている。ごんまりとした活動ですが、皆さんの生きがいになっています。

プレゼントしたのは、編み上げた短い襟巻きなどです。

六月十九日の本欄で活動をご紹介させていただき、八月十日一面「心に触れる話」でも掲載していただいていたから、「毛糸を送りたい」とお電話を数十本いただきました。多くの方が、亡くなった母親や妻の遺品を整理していて毛糸が出てきたが処分するのものは

ばかられるので、とか、老齢で編み物ができなくなったので生かしてほしい、という内容でした。そして夏から秋にかけて二十数箱の段ボールが届いたので。

ある独り暮らしの高齢の女性からは「今まで四年余り、被災地の方々に何もしてあげられないと、心を痛めていました。もう目や手も不自由になつて、自分では編み物ができなくなつてしまったので、

編み棒や毛糸を使ってほしい。やっと自分にも被災地の方に支援できることが見つかりました。ありがとう」とお言葉をいただきました。感謝

するのはこちらの方なのに、その言葉に何ともいえない思いが込み上げました。

原発事故から五年近くたつ今、南相馬で汚染土が入ったフレコンバッグという袋に囲まれて生活している私たちのことを、いまだに忘れずにいてくださることだけでも、本当にありがたいと感謝の気持ちでいっぱいです。

「どうぞお元気で、良いお年をお迎えください」と、独り暮らしの支援者へ温かい気持ちのバトンをお返しします。

この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。